

岡山県昭和 38 年度上期農業観測

牛乳は安定・鶏卵肉豚は高値

県農林部ではこの4月、38年度上期（4～9）の農業観測資料を公表したが、そのうち畜産関係分の価格見とおしを中心に概要をひろってみるとつぎのとおりである。

■価格見とおし■（岡山県農家手取り、上期）

牛乳＝昨年同期の生乳1kg当り33円34銭程度で横バイ。

鶏卵＝安かった昨年同期の平均163円（1kg当り）をかなり上回り推移

肉牛＝38年度2月の263円（ぬき生体1kg当り）程度か、ややこれを下回る程度はないか。

ブロイラー＝前年度上期平均価格199円（大阪仕入値1kg当り）を僅かに下回り推移。

肉豚＝かなり安かった前年同期平均157円（生体1kg当り）より大巾に上回り堅調。

子牛（和牛）＝期末から下期にかけて、37年度下期平均の水準より回復をみせよう。

子牛（乳牛）＝37年度下期平均程度で横バイ。

子豚＝38年春（2月）の価格を若干上回る程度で推移。

品目別見とおし

牛 乳

1、上期の県下の生乳生産は、昨年同期の生産をかなり上回るものと見られるが、搾乳牛頭数の伸びの鈍化から、昨年の対前年伸び13～25%よりかなり下回るものと思われる。

また上期の全国の牛乳生産は、乳価事情等から前年同期の20%以上もの伸び率に比べると、かなり下回るものと見られるが、なおかなりの増加が続くものと見込まれる。

2、上期の牛乳の消費は、一般の景気の回復に伴って次第に上向くものと見とおされるが、夏季の天候や、38年度に輸入を計画されている脱脂粉乳に影響を受けることも考えられ、全国的は飲用向

けの消費は対前年比110～115%程度と見込まれる。

3、上期の乳価情勢の改善はこのような生産増加の見込みに対してテコ入れとなる確実な材料に乏しいが、畜産振興事業団による乳製品買上げや、国の乳価調停指導等により安定に向うものと考えられる。

4、上期の農村生乳価格（岡山県）平均は、全国的な農乳価格の動きと関連で決まるものと考えられるが、上期の情勢を考慮に入れると、昨年同期の1kg当り33円34銭（脂肪率3.2%）程度で横ばいに推移するものと見込まれる。

【解 説】

牛乳価格については周知のとおり、昨年後半からの生産と消費のアンバランスから、乳価が秋以降全国的に下向き、冬からこの春にかけて、全国平均でも1.80当り2～3円方昨年夏の乳価を下回り、生産費の値上り傾向にある折から酪農民団体などで大きな問題としてさわがれた。このため農林省でもいろいろ対策を取らざるを得なくなり、本年3月には重政農林大臣は乳業メーカー側と話しあって、2円程度の値上げを確保する旨の公表を行なった。このように生乳価格には、需給事情につれて全国的な規模での動きや、しかも生産と消費の関係で値段の動く通常の経済的変動のほか、政治的な要素がかなり入ってくるので、価格見とおしの場合にもこのような要素も含めて考える必要があり、かなり微妙な問題があるわけである。

岡山県ではこの3月1日、酪農に関連のある県段階での農協連をもって岡山県酪農会議が結成され、今後の適正な生乳取引についての指導も業務の一つとして行なうことになったが、農林省の指導によって各県がこのような、同じような組織で活動することになっているので、乳価安定にかなりの成果が上るものと期待されている。

県下の昨年からの生乳の農村価格は、県酪連と乳業メーカーとの取引契約価格が基準となり、ほぼ決

岡山畜産便り 1963.05・06

まるわけであるが、昨年4月から12月10日までは1.80当り夏乳価の62円50銭（基本乳価50円、奨励金11円50銭、酪連積立金1円）＝<1kg当り33円34銭>の横バイで経過した。その後の乳価については、県酪連と乳業者の団体である岡山県製酪協会との間で、春以来続けられた乳価交渉の結果、この5月4日ようやく昨年12月11日以後本年3月末までは、1.80当り60円と決まり、さらに本年4月以降9月まではこれより2円上回る62円の線に決定をみている。この内訳は、基本乳価は従来どおり50円に据置き、11円の奨励金（9円に夏場奨励金2円）と1円の県酪連積立金となっている。こういうことで38年度の上期の乳価の見とおしは、これでほぼ決まってしまったともいえるわけである。

しかし乳価の動きは、根本的にはやはりこの夏の飲用牛乳の伸びや、アイスクリームその他乳製品類の売行き等に左右されるわけで、今後の乳価情勢はこれから夏の天候具合や、一般の景気の回復による消費の伸びに負うところが大きい。

県下の牛乳生産は、このところ搾乳牛頭数の伸びがやや鈍化してきている傾向から、引き続き昨年を大きく上回ることは間違いないにしても、37年の毎月の牛乳生産対前年比が、13%～25%増しであったのに比べると、これをかなり下回るのではないかとみられている。一方全国的な牛乳生産の伸びも113～115%程度と伸び率が少し鈍ったとはいえ、やはりかなり伸びる予想であること、乳製品の畜産振興事業団によるこの春の18億6千万円に及ぶ乳製品の緊急買上げがあっても、まだ製品在庫がかなりあることや、買上げ乳製品もかなりの短期間で入替えを行なわねばならないこと、今年度の政府の脱脂粉乳輸入が相当大量に計画されていることなど、悪い材料もかなりあり、今後の牛乳消費の伸びに期待が寄せられているわけである。

県下の最近の飲用牛乳向けの消費は、この1月～3月までのところでは相変わらずの低調であったが、4月から以後の、ここ最近天候不順にもかかわらず伸びが上向き、消費内容のバランスがやや改善に向かいつつある兆しが見えてきているようである。

鶏 卵

- 1、38年の春びなの生産は前年をやや上回るものと見られる。また昨年秋びなの全国生産も大きな伸びをみていない模様であるので、上期の成鶏めすの羽数は前年同期を僅かに下回るものと考えられる。したがって上期の鶏卵生産は、経営規模の拡大、生産技術の向上等を考慮に入れ、また本年早春びなの餌付けが少なかったことなどから昨年並

鶏 卵 消 費 の 内 訳 [全国] (単位:トン)

	生産量	輸 出	マヨネーズ	特 需	種 卵	業務、家庭用
昭 30	364,400	1,653	1,732	1,263	4,780	351,152
34	440,800	5,684	5,792	837	11,610	411,887
35	516,800	6,850	7,477	811	16,390	479,682
36	695,300	7,344	10,644	869	17,488	651,519
36年割合	100,0	1,1	1,5	0,1	2,5	93,7

資料：農林大臣官房調査課調べ

(注) 業務家庭用は一括されているが、その区分比率は概ね20%、80%と想定される。

みの程度に止まるのではないかと考えられる。

- 2、鶏卵の家庭用消費は、給与水準の上昇とともに地方都市での消費もかなり伸びているものと考えられ、引続き順調を見込まれる。マヨネーズ加工向けも38年度の業界の増産計画から、昨年比に比べ20～30%増しの買付けも予想される。
- 3、上期の鶏卵の農村価格（岡山県平均）は、季節的な変動はあっても比較的安かった昨年同期の平均163円（1kg当り）をかなり（10～15円方）上回るものと見込まれる。

【解 説】

今年度上期の産卵鶏羽数のもとなる昨年からのヒナ生産の状況についてみると、昨年の春ビナ生産は全国的に不調で、統計数字によればほぼ一昨年並みの1億7千6百万羽であったが、最近の傾向として肉用向けとみられる無鑑別ビナが生産がかなり増加しているため、めすビナが生産はその前年を若干下回った実績となっている。また秋ビナが生産はかなり増加しているが、春に比べると生産量が1/3程度のウエイトしかないため、実数としてはそれほど大きくない、などのため、今期の成鶏めすの羽数は昨年比に比べて、ほとんど増加していないのではないかとこのように見られている。さらに本年の夏以後に産卵を始めることになる今年の春ビナが生産も1

岡山畜産便り 1963.05・06

～3月の発生が（①種鶏羽数が昨年より殖えていない。②異常寒波による影響一などで）全国的に不調であった。などのことから、本年上期の鶏卵生産は引続いて経営規模の拡大や生産技術の向上が進んでいるとしても、昨年を多少上回る程度の生産しかないのではないかと見られるわけである。

これに対して鶏卵の消費はというと、家庭用および業務用、菓子原料、マヨネーズ等大口加工用消費も順調のようで、マヨネーズ業界の今年度の生産計画でも昨年より20～30%増しといわれている。鶏卵の輸出は、現在のところ、鶏卵価格がかなりの水準を維持する見込みであるため引き合わず、中共卵の進出等から今年度はあまり期待されないとみられている。

このようなことから、少なくとも今年度の上期の卵価は、季節的な動き一6・7月から次第に値上りし、12月頃までが高いという一につれて、例年よりやや安かった昨年度上期の水準（県下農家庭先平均1kg当り163円）より10～15円方上回る価格で動いて行くのではないかという見通しが立てられている。

秋から以降の卵価については、今年の春ビナの出が後半かなり回復してきているので、当然生産増が考えられるが、来年はオリンピックの開催年でもあり、景気の回復や養鶏規模の拡大とともに、一方で零細規模の飼養が減少するなど、あまり急激な飼養増加もないのではないかとみられ、卵価変動の周期からすれば当然下向く年であっても価格維持に良い材料もみられるようである。

肉 牛

1、肉用牛のと殺向け出回りは、枝肉価格の好況からかなり増加しているが、和牛資源の停滞傾向、酪農事業が次第に安定化する見とおしから、肉牛の供給には大きな変化はなく、牛枝肉の生産は昨年と同程度と見込まれる。

2、上期は牛肉の不需要期でもあり、逐次景気の回復があっても、消費増加に直ちに大きく響くことはないものと考えられる。また最近の諸物価の値上りによる食生活への圧迫や、食糧品消費内容の多様化による牛肉消費の伸びなやみ傾向もみられるので、上期平均の牛枝肉価格は高い水準にあっ

た前年同期（大阪市場ぬき枝肉卸値 kg 当り平均389円）をやや下回る程度で推移するものと考えられる。

3、上期の肉牛の農村価格（岡山県平均）は、枝肉価格の動きにつれて37年度下期（38年2月ぬき生体1kg当り）の260円程度がこれをやや下回る程度で推移するものとみられる。

【解 説】

最近の成鶏飼養羽数、産卵量〔岡山県〕

	成 鶏 め す		産 卵 量	
	羽 数	前年対比	数 量	前年対比
昭35	1,848	113.2	416,243	118.3
36	2,355	127.4	522,127	125.4
（1～6月）	2,109	117.8	253,837	117.5
（7～12月）	2,600	136.5	268,290	134.0
37	—	—	632,327	121.1
（1～6月）	2,877	136.4	348,839	137.4
7	2,361	115.3	48,086	116.6
8	2,422	118.1	45,124	119.3
9	2,657	118.1	44,558	119.4
10	2,846	97.9	46,142	99.8
11	2,979	93.1	47,813	94.9
12	2,889	90.4	51,765	92.0
（7～12月）	—	—	283,488	105.7

（注）37, 7～12月は概数

資料 農林省岡山統計調査事務所

全国の牛枝肉の生産実績をみると、このところ昭和35年以来、年間約13万7千トン程度で横パイを続けている。また全国的な牛枝肉の動きは過去37年までは年々前年価格を上回る好況をみせてきている。

これに対して岡山県での最近の牛枝肉の供給状況は、県衛生部の統計によると37年中の肉牛（和牛）と殺頭数は1万1,000頭で、前年を5.2%上回っており、枝肉量も2,300トン（県民1人当り135gになる）で同じく6.6%増しとなっている。これは肥育に対する意欲の高まりや、零細経営農家の和牛の手離しなどによった供給増加ではないかとみられるが、生体での県外出荷の増加とともに県内和牛資源の増加しない原因の一つとなっている。

また肉用牛の頭数は全国的にこのところ横パイの状況にあり、これまでの国内での肉牛の供給不足か

岡山畜産便り 1963.05・06

らの牛肉の値上りをおさえるため、政府は30年末から今年3月までに牛枝肉を3,000トン国外から緊急輸入するなどの措置を取っているが、昨年暮れ頃から全国的な肉牛の供給増加の傾向が現われはじめ、市況は軟化し始めている。

阪神市場においても、昨年12月頃から年末需要をあて込んだかなりの肉牛の出荷があったため、以後滞貨気味で、それまで年々じり高を続けていた牛枝肉価格がはじめて横バイから下向きに転じ3～5%方の値下りをみることとなった。現在までの動きも昨年同期よりやや安いといった市況が続いている。

さらに牛肉の消費見とおしとしては、諸物価の値上りによる食生活への圧迫や食糧品消費内容の多様化による牛肉の伸びなやみの傾向もみられるので、これから秋へかけての牛肉不需期の価格の予想は希望が持てず、大きな変化はないとしても昨年の同期をやや下回るものとみられている。(肉牛価格の見とおしについてはその後の情勢変化により一部修正を行なった)

肉 豚

1、上期のと殺向け肉豚の出回りは前年同期をかなり下回るものとみられる。

37年12月現在の農林省統計によれば、子取用めす豚頭数は全国で41万2,000頭であり、これは前年同月に比べかなり少ないと考えられる。またこの春農林省でまとめられた飼養頭数の見込み推計によれば、38年2月を底に再び増加の傾向をたどり38年8月には前年同期を上回る頭数にまで回復するものと見込まれている。したがって上期の期間内に生後7～8ヵ月の出荷適令期に達する肉豚の数はなお前年同期より少なく、上期末頃から肉豚の供給は大きく増加してくるものと考えられる。

2、上期の食肉加工用の豚肉の需要はさらに強まり、肉牛の増産が急速に望めないことから豚肉消費は引続いて順調に推移するものと見込まれる。

3、上期の肉豚の農村価格(岡山県平均)は品不足の見とおしからかなり安かった37年度上期平均の157円(生体1kg当り)より大巾に上回り堅調に推移するものとみられ、食肉加工の始まる6月から7～8月にかけて特に高値をみるのではないかと

と見通される。

ブロイラー

1、上期のブロイラー生産は、最近の無鑑別びなの発生増加傾向からも引続き増加するものとみられるが、本年1～2月の安値の経過からして餌付け控え等も考えられるので急激な増産は行なわれないのではなかろうか。

2、ブロイラーの消費は毎年30%程度の伸びがあるとされているが、本年はこれまでの天候不順のためやや伸びなやみ、冷蔵在庫がかなりある模様である。このため上期のブロイラーの平均価格は、37年度上期平均価格(大阪中央卸売市場標準仕入値199円)を僅かに下回る程度で推移し、上期末からの季節的な値上りは期待出来ないものとみ込まれる。

子 牛

■和牛子牛

1、肉牛価格にかなりの水準が見込めることや、現在の子牛(和牛)価格の他物価に対する安値から上期の農村子牛価格は次第に回復に向い、月をおって次第に上昇し9月～11月にかけては37年度下期平均の3万9,600円(めす4～6ヵ月、1頭当り)にかなり近づく回復を見せるものと見込まれる。

■乳用牛子牛

1、子牛価格は酪農情勢によってかなり敏感な動きを示すが、今年の夏期の市乳の売行きいかんで乳価情勢好転等の材料があれば子牛価格に影響することも考えられる。しかし現状では上期の農村価格のみとおしは、37年度下期平均の4万9,200円(ホルスタインめす4～6ヵ月、1頭当り)程度水準で横ばいするものと見込まれる。

■子 豚

1、上期の子豚生産は引続いて拡大し、昨年度の最高を記録した水準に近づくものと考えられる。

2、このような生産頭数の増加があっても、豚肉価格水準の高い見とおしから上期の子豚価格も肉豚価格にともなって引続いて強いものとみられるが、高値による警戒等もあって期末には多少軟化の徴

岡山畜産便り 1963.05・06

候も出るのではないかと考えられる。

- 3、上期の子豚の農村価格（岡山県平均）は現在（38年2月）の4,075円（中ヨーク生後40～60日1頭、農家購入価格）を若干上回る程度で推移するものと見とおされる。

農林省昭和38年度市況観測資料より

飼料

■見 通 し

- (1) 38年度の配合飼料の需要はひきつづきかなり増加するであろうが、生産もかなり増加するであろうし、一方、その主原料であるとうもろこしや、マイロの輸入も増加するであろうから、配合飼料の農村価格は成鶏用、乳牛用とも前年度とほぼ同程度であろう。
- (2) 大豆油かすの需要は飼料用として配合飼料の増産にともなってかなり増加するであろうが、大豆の輸入増加にもとづくかすの供給増加がみこまれるので、肥飼料用として大豆油かすの農村価格は前年度にくらべて弱含みであろう。
- (3) ふすま、ぬか類の供給は前年度よりやや増加するとみこまれ、また大麦を含めた飼料穀物の輸入増なども考えられるので、米ぬかの農村価格は前年度と同程度であろうが、ふすまおよび麦ぬかは前年度と同程度が強含みであろう。

■経 過

- (1) 畜産の発展にともない濃厚飼料の消費は年々急増しているが、国内における濃厚飼料の生産の増加が低いので、ふすま、とうもろこし、マイロ、小麦などを中心に輸入が増加し、輸入依存度が高まっている。一方濃厚飼料の消費は単体よりも配合飼料としての増加がいちじるしく、その生産量は急増している。
- (2) 37年度（4月～38年2月）の主要飼料の供給量は、ふすま、ぬか類は米ぬかの増加にもかかわらず、とくに民貿による輸入ふすまの減少がみられ、また麦ぬかも減少したので前年（同期）にくらべてやや減少した。また、大豆油かすも輸入が余りなかったので、国内生産は増加したが全体としてはやや減少した。しかし、とうもろこしおよびマイロの輸入は大幅に増加した。一方、配合飼

料の生産（4月～38年1月）も消費の増大と工場の新增設にともなって増加率は鈍化したがおお大幅に増加した。

- (3) 飼料の農村価格（全国平均）は36年度には、やや値上がりしたが、37年度に入ると横ばいに転じ年度平均では前年度とほぼ同程度であった。